

MUSASHINO^{Vol.107} *for* TOMORROW

巻頭

ヴェルディ・イヤーの
イタリア音楽事情

堂満尚樹

卒業生インタビュー

パレットの色をふやそう

田島 勤

卒業生の留学ライフ

異国で芽生えた
伴奏家への想い

恩田文江



表紙：ヘーター・ヤブロンスキー（ピアノ） © B. Ealovega

October 2013
vol.107



ヴェルディ・イヤーの イタリア音楽事情

堂満尚樹

音楽ジャーナリスト

ミラノ在住の音楽ジャーナリストである堂満尚樹さんにとって、イタリアは音楽、映画、絵画そして食べ物に代表される“文化の宝庫”、子供の頃から憧れの国だったといいます。その憧れの地に渡ったのは、武蔵野音楽大学を卒業し、3年間の高校教師生活を経てのこと。以来22年、彼の地の音楽事情を日本に伝え続けて



堂満尚樹 (ミラノ在住)

Naoki Domitsu

武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒。鹿児島県の神村学園で3年間教員を務め、その後イタリアに渡る。ミラノではフリーランスのジャーナリストとしてイタリアの音楽事情を日本に伝えながら、本場の優れたアーティストを日本に紹介、コンサート企画およびコーディネートを行っている。また、日伊間における文化交流の催しをイタリア内でも行っている。

いる堂満さんに、ヴェルディ・イヤーを迎えたイタリアのオペラ界についての一文を寄せていただきました。



イタリアの秋 ヴェルディの秋

イタリアの秋は日本の秋ほど彩がない。太陽の国と呼ばれすべての季節がカラフルに配色されているながら、ただ秋に限って色気がないのである。ヴィヴァルディの『四季』より“秋”の中には牧歌的な色合いや温度を感じることができるが、これは作曲家が暮らしたヴェネツィア地方や北イタリアの季節感ではなく、イタリアでも南の地方、あるいは異国の香りすら感じてしまう。たとえばミラノの秋は、これから訪れる厳しい冬への導入でもある。日本のような秋晴れの日は少なく、灰色の雲が空を覆うようになる。木々の色彩に変化はあるもののそのほとんどが黄葉止まり、燃えるような紅色はほとんど見られない。気持ちが澁みがちになり、そんなこの季節に色合いを与えてくれるのは、やはり音楽である。

ミラノとトリノが共同で開催して

いるMITO（ミラノ・トリノ）音楽祭が9月にほぼ2週間に渡り行われる。もともとトリノ9月音楽祭という名称で1978年よりはじめられた企画を、両都市間での交流の中でさらに膨らませていこうと2007年より本格化させたもの。期間中はその両都市でのコンサートが行われるが、ジャンルはクラシック音楽に止まらずジャズ、ニューエイジ、民族音楽など多彩である。

そして10月になると、パルマを皮切りにイタリアのオペラ界が動き始める。10月10日、200歳の誕生日を迎えるジュゼッペ・ヴェルディ。もちろんパルマだけではなくイタリアの多くの町村、あるいはヴェルディを愛する他の国々までもがその生誕を祝って何らかの催しをすでに行い、また、今まさに準備中である。ヴェルディのお気に入りだったというジョヴァンニ・ボルディーニがパリで描いた肖像画、シルクハットにマフラー姿の一枚は今日、我々にとってより馴染のあるマエストロ像であろうが、今年はその絵姿をイタリアの至るところで見ることができる。パルマや青少年期を過ごしたブッセート、そ



▲ パルマ王立歌劇場がヴェルディ生誕100年祭(1913年)に行った祝祭プログラム

の他ヴェルディの地と呼ばれている小村も例外ではない。地元の偉大なマエストロを称えて21世紀より本格的に始動した音楽祭のシーズンになると、ゆかりの町村はヴェルディ色になる。オペラ制作により保守的なイタリアの中でもっとも作家思想と伝統を重んじたのがこのパルマの王立歌劇場であり、ヴェルディの着想そのままを舞台理念として掲げてきた。「ヴェルディオペラの原本はパルマにあり」が、オペラを愛する人々の合言葉となり、舞台上がることはアーティストのステータスでもあった。その伝統の劇場運営がこの2年ほど失速する。劇場内部に不和が生じてスタッフの半数が入れ替わり、同時期に行われたパルマ市の市長選では芸術支援に反旗を掲げる新市長が選出されたのである。文化の中核にそれを抑制する作用が働いたことはかなり深刻な問題として取り上げられてきたが、自治体によるイベントへの助成が決まったことでまずは今秋を充実させながら、今後の好転に期待したい。

窮地の国立歌劇場

ヴェルディといえば、ローマ時代の円形競技場を巨大スペクタクルの

舞台に仕立て上げたヴェローナ歌劇場を忘れてはいけない。蛇行するアディジェ川に抱かれるように木々の生い茂るブラ広場が広がり、アリーナはその一角に鎮座している。真夏のフェスティバルとして3ヵ月(6月中旬～9月上旬)眠れぬ夜が続くのである。音楽祭の発起はヴェルディの生誕100年を記念してのもの。1913年8月10日の「アイダ」は、当時の劇場支配人、オットーネ・ロバートと経営への影響力を持ちラダメスを演じたテノール歌手、ジョヴァンニ・ザナテッロがタッグを組んで行った。このこけら落としは盛大に行われて、指揮台には当時スカラ座の音楽監督トッリオ・セラフィンが上っている。プッチーニ、マスカーニ、ザンドナイ、ボーイト、それに作家カフカなどヴェルディ作品に影響された多くの著名人の参列が記録されている。それからさらに1世紀が経ち、ヴェルディの偉業を称える声はそのままに興行としても驚くべき功績を取めている。

イタリア国家の伝統文化への対応が年々、他人事化している。芸術を庇護したいという気持ちがないわけではないのだが、いかんせん国の財政に余裕がない。お金のない国がま

ずどのようにするかという見本をここに見ることができる。単純に考えて、国益にならぬものをまず切り捨てるといことは間違いではないのだろう。しかし、この現代までイタリアのアイデンティティーと万国に胸を張ってきた自国のシンボルを、不要の産物とみなしてしまうことが良策とは思えない。国の補助金をまず2006年に削減、その後、一時的な回復は見せるものの2009年に再度大幅に減らされてイタリアに12ある国立歌劇場は瀕死の状態に陥る。もちろんそのような窮地を強いられたのはオペラ上演が目的である歌劇場だけではなく、一般のコンサート事業、映画、舞踊、散文劇など様々な文化事業が悲運の対象となった。今後、国からの援助が望めないと判断したら、そこからは各母体が知恵を絞るしかない。

独自の道を歩む 二つの歌劇場

ヴェローナ歌劇場の成功の裏側には常に外に向いている視野の広さがあった。古代競技場を大規模なスペクタクルと組み合わせた先人の知恵と既存の遺跡を、自在に活用できた



▲ ヴェローナ歌劇場公演「アイダ」第二幕二場、凱旋の場／ヴェルディ生誕100年祭の舞台を再現(2012年、前ページ写真も同じ) ©Arena di Verona



▲トリノ王立歌劇場公演「仮面舞踏会」最終幕（2011年）
中央オスカル役のセレーナ・ガンベロニ ©Teatro Regio Torino

運は確かにあるかもしれない。1930年に法人化されて近代的な設備投資を行い、1967年には国際法に基づき芸術監督を立てることで、その辺りからすでに世界を意識した興行へと早期の変貌を遂げている。政府の理不尽な補助金の削減にも収容総数22,000人という数字をうまく使うために、毎日演目を変えながら興行していくイタリアでは珍しいレパートリー方式を取り入れたことが大きな成功につながっている。この2013年に上演されたヴェルディ作品は全5演目、それに「レクイエム」が加わった。中でも注目を集めたのが2つの「アイダ」。宇宙的な要素をふんだんに取り入れたカルルス・パドリッサとアレックス・オジェの共同演出。アクロバットのな舞踏を取り入れた、かなり不可解な舞台がひとつ。そして本命は、1913年の舞台を演出家、ジャンフランコ・デ・ボジオにより復元されたクラシックでありながら重厚な舞台。指揮台にはテノールでありながら近年はバリトンとしても大活躍のプラシド・ドミンゴが上っている。

トリノ王立歌劇場も愛情と知性に溢れたイタリア国内において非凡な経営理念が目を引く。ヴェローナよりミラノを通過して、そのままあと120キロほど西に向かう。自国とフランスとの国境がすぐ近くに引かれていることもあり、リソルジメント（イタリア統一）まで少なからずその隣

首都として存在をアピールしていた英知が漲り、劇場の対外交渉に長けている、そのあたりに歴史的に積み上げられた経験を感じる。イタリアの一部であるという感覚がこのトリノにはあまりない。国から突如見放された影響はあろうものの、その事実を受けていち早く動いたのがこのトリノの劇場だったように記憶している。やはり同じような感性を持つ地場産業とうまく提携しながら未来を見据えた経営を行っているのである。このような劇場であるから、舞台上はいつ何時も楽しませてもらえる。機知にとんだプログラムにうまく指揮者や演出家を振り分けながら、アーティストも一流どころが好んでここ

国の影響下にあった。占領されていた時代、周囲をけん制していた時代、サヴォイア家の首都、あるいはイタリア王国の

を訪れる。マエストロ、ジャンナンドレア・ノセダを中心とした音作りには定評があり、現在、イタリアのオーケストラでは間違いなくトップクラスであろう。10月の開幕から3本、ヴェルディ作品を揃えてきた。シーズンの開幕オペラとして準備されている「シモン・ボッカネグラ」が楽しみである。

オペラの殿堂・スカラ座

いま一度、北イタリアの中心都市ミラノに戻ろう。そこにはオペラの殿堂として紛れもないスカラ座がある。ドゥオーモ（大聖堂）からヴィットーリオ・エマヌエレーアーケードを北に抜けると、ダ・ヴィンチ像のあるスカラ座広場に出る。左手に聳えるのがこれまでオペラ史の支柱となり、これからの厳しい時代を先導していかねばならないスカラ座である。劇場の知名度を考えれば、いくら政府からの援助が削減されたといっても卓越した外交手段などにより安泰だろうと思われがちである。

劇場総裁、ステファン・リスナーはじめ辣腕スタッフにそれを問えば、「そんな生易しいものではない」と即



▲スカラ座公演「椿姫」第一幕（2007年）／リリアーナ・カヴァーニ演出、ヨナス・カウフマン（アルフレード）とアンジェラ・ゲオルグユー（ヴィオレッタ） ©Marco Brescia/Teatro alla Scala



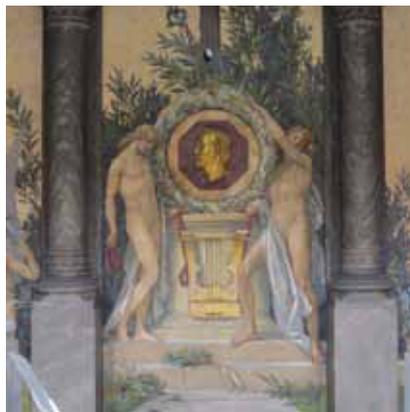
▲ スカラ座公演「ドンカルロ」(2008年) ©Marco Brescia/Teatro alla Scala

答する。平均、8割強の集客が叶い、その興行収入とイタリア内外の企業から支援を受けるも制作費や雇用費などをまったく賄えないのだという。スカラ座においてはすべてが術違い、改善策として国そのものが芸術に対するスタンスを改めなければこの先はないという。このヴェルディ・イヤーは、それでも殿堂たる所以を見せてくれている。7演目のヴェルディ作品をプログラムに並べて、その上、「ニーベルングの指輪」他、2作品を加えて同じ200歳を迎えるワーグナーへの敬意も忘れてはいない。並べられたヴェルディの珠玉をすべて異なる指揮者で見せたり、オリジナルの時代背景に縛られることなく意図の伝わる演出を心掛けたりと、もちろん賛否はありながら充実した内容が見てとれる。

楽しみなのは、次シーズンの開幕にヴェルディ・イヤーの締めくくりとして「椿姫」を掲げてきたこと。フリジェリオ、ヴィスコンティ、ゼッフィレッリ、カヴァーニと名だたる演出家がこれまで手掛けてきたいわゆるいわくつき作品を、ロシア出身の気鋭が任されたのである。世界が注目すること間違いのないだろう。

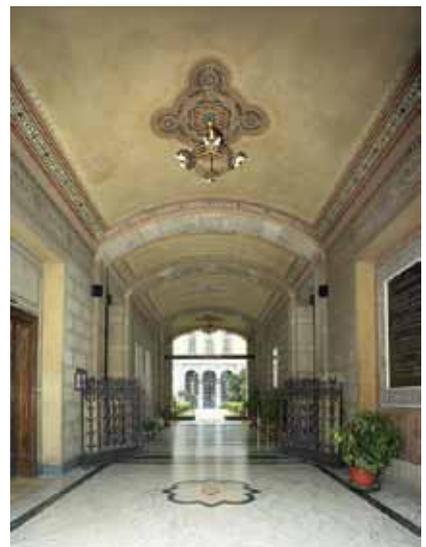
イタリア生活22年

そもそもイタリアへ向かったのは自分の中のわだかまりを払拭させるためだった。教わっている時にも留めなかったことが教える立場になってはじめて自分の中で疑問となり、イタリアについてもっと知りたいと思うようになる。28歳で教職を離れてミラノにやってきた。語学学校に通いスカラ座の栈敷席に学ぶ、それがミラノでの第一歩となった。音楽との出逢いは人との出逢いとなり、人々を育む大地との出逢いでもある。レアな音楽シーンを日本に伝えていこうと書きはじめたことがきっかけとなり、イタリアをまわりはじめて気がついたら22年の歳月を



過ごしていた。学び終えることなど当然なく、この頃益々、音楽の深みにはまってしまっている。

時間さえあればミラノ郊外にある「ヴェルディ憩いの家」を訪ねる。広大な荒地を購入した晩年のヴェルディは「どのようにすべきかあれこれ考えあぐねていて、ふいに妙案が浮かんだ。家をつくろう。年老いた芸術家が安心して余生を送ることのできる憩いの場を。作曲家としての自分の名声など20年もすれば、きれいさっぱり忘れ去られてしまうだろう。それならば、かたちとして残るものをつくりたい」。ヴェルディの残した言葉は正しくはなかったが、かといって嘘でもなかった。作品の印税収入と協力者の寄付金のお蔭で、年老いた芸術家たちは安心した余生を送っている。改修工事を終えた礼拝堂階下のクリプタは美しく輝き、10月10日の式典を待つことになる。私も館内の音楽ホールにて14日、4人のオペラ歌手による「ヴェルディ・オペラアリアの夕べ」を行うことになっている。偉大なるマエストロの節目を祝う大切な行事に参加できる喜びを今、こころから感じている。



▲ ヴェルディ 憩いの家 (ミラノ)

◀ 憩いの家の礼拝堂の階下、クリプタ上部のモザイク画

卒業生インタビュー

パレットの色をふやそう

● 田島 勤 ●

(読売日本交響楽団 首席トランペット奏者／本学講師)

読売日本交響楽団（以下、読響）の首席トランペット奏者を、現在にいたるまで24年間務め、2009年からは母校である本学の非常勤講師として後輩の指導にもあたっておられる田島 勤先生。先生のこれまでの音楽人生を振り返っていただくと共に、音楽の道を志す若者へのメッセージとアドバイスを伺いました。

(2013年7月30日取材、文責編集部)



田島 勤 *Tsutomu Tajima*

1959年静岡県生まれ。静岡県立清水南高等学校（音楽コース）卒業後、'77年、武蔵野音楽大学入学。'81年、同大学卒業。同大学卒業演奏会、NHK-FM 新人演奏会に出演。同年8月、草津夏期国際音楽アカデミーにて故ピエール・ティボー教授にレッスンを受ける。同年11月、東京文化会館推薦音楽会に出演。'82年、東京フィルハーモニー交響楽団入団。'85年、長野県民芸術祭にて、尾高忠明指揮、東京フィルと『ハイドン／トランペット協奏曲』を協演。'87年、文化庁派遣芸術家在外研修員としてドイツ・ハンブルク音楽大学に留学。'88年、帰国。東京フィルに復帰。'90年、読売日本交響楽団に首席奏者として入団。以来、24年間首席奏者を務めている。戸部 豊教授、ペーター・カーレンゼー教授、故野崎季義氏に師事。武蔵野音楽大学、桐朋オーケストラ・アカデミー非常勤講師。

「君はトランペットね」

—— 先生が音楽の道に進むきっかけは？

田島 小学生時代の3つの体験ですね。ひとつは課外活動の合唱部で、ハモる気持ち良さを感じたこと。ひとつは音楽の授業で大太鼓を任され、大勢の中で「ドン！」と叩くときの気持ち良さに目覚めたこと。そしてもうひとつが、6年生のときに体育館で中学の吹奏楽部の演奏を聴き、ブラスの響きに心を動かされたこと。こうした体験から、徐々に音楽に惹かれていきました。

—— トランペットを始められたのは？

田島 中学に入り、吹奏楽部の部室にフラフラと吸い寄せられました。顧問の先生が一言「君はトランペットね」。それから、ずっとトランペットひと筋です（笑）。当初は吹奏楽全体の柔らかな響きに憧れていただけで、その一員になれたらそれでいいという感じでした。幸いなことに中学時代に2度も全国大会に出場するという経験をして、もっと上手になりたいという欲が芽生えてきました。

—— それで高校の音楽科に進むわけですね。

田島 清水南高校の音楽コースです。あるとき、高校の卒業生で武蔵野のトランペットの先輩の演奏会が地元で開かれました。聴きに行ったら面識を持ち、その方を教えた戸部 豊先生を紹介していただき個人レッスンを受けるようになり、その縁で大学もこちらに決めたわけです。



▲ マラーの交響曲第3番を吹いたサントリーホールでの定期演奏会（2004年1月）

管楽器なのに声楽

—— 武蔵野時代で思い出に残っていることは？

田島 サークル紹介の日、「聖書研究同好会」のメンバーが歌う賛美歌のハーモニーが美しく、受験でガチガチになっていた気持ちが解かされるのを感じました。それで即入部。学生寮でも一緒だった声楽の先輩と仲良くなり、「第九」の合唱の授業にこっそり出席するようになりました。声楽科の皆と一緒に練習し、読響と共演した「第九」の舞台にも立たせていただきました。こうしたことは、今では考えられませんね（笑）

—— 黙認してもらったのでしょうか（笑）。歌を学んだことは何かプラスになっていますか？

田島 私はレッスンの際にしばしばこうアドバイスします。「もし歌詞が付いていたらこうだろう、ということ想像してごらん」と。ただ音符を追うだけで満足せず、もっと音楽的な探求心を持ち、興味の対象を自分

の楽器だけで終わらせないようにすることが大事だと思います。

武蔵野での出会い

—— 武蔵野の4年間で得たものは？

田島 素晴らしい仲間でしょうか。学年・専攻に関わらず、本当に仲が良かったですね。聖書研究同好会もそうですし、他の専攻の人たちと交流を持てたことで、視野が広がったように思います。

—— 遅くまで練習したそうですね。

田島 ほとんど毎日、夜10時に警備の方がカギを掛けにくるまで地下の練習室で吹いていました。私が入学した年、4年生に関山幸弘さん、佛坂咲千生さん、橋本 洋さんがいらっしたんです。3人とも現在は武蔵野の先生ですね。練習室には、この三羽鳥の誰かが必ずいましたし、在京のオーケストラ団員の方も来られていました。色々な人の音を聴くことができ、すごく刺激になりました。

—— その後の留学や就職にもつながる出会いもあったそうですが。

田島 1年生の終わり頃、練習室で一人で吹いていると、長くドイツにいた先輩が偶然おいでになって声を掛けてくださいました。興味深い話をいろいろ聞かせてくださり、自然と「行ってみたい」と思いましたね。ま

た2年生のときには、当時、東京都交響楽団にいた先輩の誘いでオーケストラのエキストラを初体験しました。お二人との出会いは、外に目を向ける良いきっかけになりました。

東京フィル入団そして留学

—— 卒業後、東京フィルに入団します。

田島 ダメなら田舎に帰って指導者になろうと思っていましたが、運良く東京フィルに合格しました。そこまでは伏線があります。3年生の9月にグループコンサートがあり、演奏したのがたまたま2ヵ月後に行われる東京フィルのオーディションの課題曲でした。体に入っている曲だし、力試しのつもりで受けてみました。在学中ということもあり採用は見送られましたが、最終選考の4人に残ったんです。その後、エキストラで呼ばれるようになり、結果的に入団につながりました。

—— 東京フィル在籍中に念願のドイツ留学をはたします。

田島 卒業してすぐ留学する友達もいましたが、私は東京フィルで地道に勉強しながらコツコツ貯金して、20代のうちには必ず行こうと思っていました。実現したのは28歳のとき。留学先はハンブルク音楽大学のペーター・カーレンゼー教授のもとでした。教授と最初に会ったのは、カルロス・クライバーがミュンヘンのオペラハウスのオーケストラと共に来日公演をした際。わざわざ1番トランペットとして教授をハンブルクから連れてきたんです。そのときホテルまで行って、直談判して弟子入りの許可をいただきました。

—— 何か留学中のエピソードをお聞かせください。

田島 安い中古車を買って、ハンブルクから片道400キロのベルリンまでベルリンフィルを聴きに何度も通いました。当時、旧・東ドイツのアウト



▲ドイツ留学中の田島先生と奥様。右は恩師ペーター・カーレンゼー教授（1988年7月）

バーンはデコボコで、その道を飛ばして行ったものです。

読響の首席奏者へ

—— 帰国してから読響入団に至る経緯は？

田島 妻が武蔵野の同期でヴァイオリンをやっており、同じ東京フィルに在籍していたのですが、ドイツへは揃って休団して行きました。帰国後、妊娠がわかり、妻はそのまま退団。経済的なことを含め今後どうしようかと悩んでいた時期に、幸運にも読響の首席のオーディションが20数年ぶりに行われることになったのです。応募者は著名な楽団の団員を含め約30人。1日目は全員が課題曲を吹き、2日目のオーケストラスタディに乗ったのは、私だけでした。楽団員を前に冷や汗をかきながら演奏し、入団が叶いました。

—— 読響での一番の思い出は？

田島 すり切れるほど聴いたレコードがあります。それは、クルト・ザンデルリンクが指揮するドレスデン・シュターツカペレの『ブラームス全集』。いぶし銀の響きにずっと惹かれていました。読響に入ってから、なんとそのザンデルリンクの指揮でブラームスを吹くことができたんです。例えようのない幸せな演奏会でした。結果的に、それがザンデルリンクの最後の来日になってしまいました。『展覧会の絵』はさまざまな指揮者とやりました。思い出すのはチェリストでもあるロストロポーヴィチ。棒



▲読響の首席奏者になった翌年、サントリーホールにてマーラーの交響曲第4番を演奏（1991年5月）

のテクニックというより、すごい迫力で、ロシアの熊がノシノシ歩いてくるようなイメージでしたね。

プレーヤーの心構え

—— 武蔵野の後輩たちにメッセージをお願いします。

田島 私は常にシンプルに吹くことを心掛けています。指揮者ごとに要求は違います。大事なことは、言われたことに応えられるかどうか。この色しか出せません、ではダメ。いろいろな色を出すことができる、そのベースとなるのは、いたってシンプルです。当たり前前を当たり前前に行ける練習を日々黙々とこなす、これ

に尽きます。自分本位に吹く人は、クセばかり目立って溶け合いません。まずは、溶け合うことができるものを作るべき。学生時代は、余るほど時間があります。自分の楽器以外のものも聴いて吸収することが大切です。視野を広げるためには、海外に出ることも良いでしょう。DVDで満足せず、海外のオーケストラやオペラなどの本物を体験すること。今の世の中、情報は溢れています。大事な情報は、自分から取りにいかないと。好きなものをとことんつきつめてみる、それが自分の引出しを増やし、自分自身のパレットの色をたくさん持つことにつながるでしょう。

—— 最後に今後の抱負をお聞かせください。

田島 武蔵野の創立80周年の年に、母校の非常勤講師になりました。2年目から受け持った主科の学生が今年4年生です。指導者としての私の想いは、武蔵野で学ぶなかで、1年1年、確実にステップアップしてもらいたいということ。その時ごとに難しい曲にチャレンジし、完璧にできなくても自分なりの足跡を残せたという達成感をもって卒業してもらえたら



▲ 本学江古田キャンパスの正門にて

と思っています。読響の首席としては来年25年になりますが、ずっと首席にしがみついている気はありません。オーケストラにも新陳代謝のサイクルがありますし、次の世代の首席が順調に育てば、今度は教える側にまわりたいと思っています。



▲ 本学創立80周年記念式典にて
(2009年12月4日/ベートーヴェンホール)



CD
昨年10月
リリース

カンブルラン指揮 読売日本交響楽団
ストラヴィンスキー:「ペトルーシュカ」
フランク:交響曲

▲ 「ペトルーシュカ」で田島先生のソロが聴けます。

音楽の万華鏡 24

1713年:バロック音楽の新たな展開

ヴェルディとヴァーグナーに彩られた2013年も終盤にさしかかった。音楽史を振り返ると、新しい世紀から十数年経た頃には、様式や作曲家の興味深い交差が見られる。例えば1713年には、イタリアではヴァイオリニスト、そしてソナタやコンチェルトの作曲家として高名であったA. コレリが没した。コレリはローマで有力な貴族の庇護を受けて音楽活動を行い、数多くの優れた弟子たちを教育、1707-8年にはローマを訪れた青年G.F. ヘンデルと接触し、そ

のオラトリオ《復活》上演の際には弟子たちのオーケストラを率いて力を尽くした。

コレリの作品は1700年前後から急成長した楽譜出版の波に乗っておびただしく版を重ね、ヨーロッパ中に流通、そしてフランスのルイ王朝の宮廷作曲家、クラヴサン奏者、オルガニストであったフランソワ・クーブランも魅了した。彼はコレリが確立した合奏用ソナタを直ぐに取り入れ、1692年頃から宮廷での演奏用としてトリオ・ソナタを作曲していく。しかし1713年になると、自らのクラヴサン作品の普及を考えて《クラヴサン曲集第1巻》の出版に向かう。この第1巻の5つのオールド(組曲)の約半数は舞曲であるが、残りは何らかの性格を表現した、フランス的な表題の付いた楽曲である。

1713年にはドイツでも新しい展開が見られた。ヘンデルに歌劇場の就職口を世話し

たハンブルクの音楽家で音楽著述家ヨハン・マッテゾンが、最初の著作『新設のオーケストラ』を出版したのである。「オーケストラ」とは教会音楽と劇場音楽、声楽と器楽の全てを包括する表現であり、第1部は音楽用語、第2部は作曲原理を扱い、第3部「判断編」は主要な国ごとの音楽の違い、さらに調の特性と情緒の表現における作用を述べる。そしてこのマッテゾンの理論的傾向は、啓蒙主義の影響下で深められ、来年生誕300年を迎える次世代の二人のドイツの音楽家、『正しいクラヴィア奏法試論』(1753)を著わしたC.Ph.E. バッハ(1714-1788)とその10年後にウィーンでオペラ改革を行ったC.W. グルック(1714-1787)に受け継がれていく。

寺本まり子(本学音楽学教授)

異国で芽生えた伴奏家への想い

恩田文江

(ピアノ／パリ国立高等音楽院在籍)

恩田文江さんは武蔵野音楽大学を卒業後、ベルギーのエリザベート王妃音楽院、フランスのエコールノルマル音楽院を経て、現在はパリ国立高等音楽院で学ばれています。夢を実現させ、長きにわたる留学生活を送っている恩田さんに、異国の地で何を学び、どのような音楽経験をしているのか、お話を伺いました。

(2013年9月3日取材、文責編集部)



恩田文江 *Fumie Onda*

1983年、東京生まれ。武蔵野音楽大学附属高等学校、武蔵野音楽大学卒業。重松万里子、重松聡、エルジェーベト・トゥシャ各氏に師事。'05年、大学卒業後、ベルギーのエリザベート王妃音楽院に入学、ディミトリス・サログロウ、アブデル・ラーマン・エルバシャ各氏に師事。ベルギー各地で演奏活動を行う他、フランスのマントン音楽祭にも出演し好評を博す。'09年、紀尾井ホールでのリサイタル後、再渡欧。フランスのエコールノルマル音楽院でジャン・マルク・ルイサダ氏にピアノを師事し、'11年からは、パリ国立高等音楽院の大学院課程でアンヌ・ボゼック氏のリート伴奏科に入学。以降、伴奏者としても活動の幅を広げる。'08年、アディア・アリエヴァピアノ国際コンクール（フランス）第2位。現在パリ国立高等音楽院の最終学年に在籍中の他、メゾン・ラフィット音楽院（パリ近郊）の伴奏員及び楽典講師。

— 留学のきっかけは？

恩田 武蔵野の客員教授でいらしたトゥシャ先生に小さな頃から師事し、先生のおかげで10歳のときにヨーロッパで演奏する機会を持ちました。その頃からいつかは本場で勉強したいと思い続け、大学を卒業してやっとチャンスを得たという感じですね。

— 留学時の手続きで何が一番大変でしたか？

恩田 提出する書類を揃えるのが大変でした。特にベルギーの時はなかなかビザがおりず、色々な方に相談したり、何度も大使館に通ったりして何とか実現できました。

— 最初の留学先を決めた理由は？

恩田 当初はイギリスかドイツが希望でしたが、大学時代に何度か国際コンクールを受けるなかでエルバシャ先生と知り合い、先生が誘ってくださったんです。そこがエリザベート王妃音楽院で、ピアノの教育にも定評があるということで決めました。



▲ エリザベート王妃音楽院

— その後、フランスに留学しますね。

恩田 ベルギーから帰国したあと、自分がどうしたいのか色々悩み、葛藤がありました。自分が本当にやりたいことを、もう一度向こうに行って確認したいと思い再渡欧しました。エコールノルマルに決めた理由は、自分のピアノを鍛錬するのに適した場所だと思ったこと、ピアノ指導でも有名なルイサダ先生がみてくださるということでした。そこでの初見の授業で、担当のベトナム先生が私の初見力を買ってくださり、伴奏者



▲ ブリュッセルにてオーケストラと共演（2007年）



としても向いているのではないかと。そしてパリ国立高等音楽院大学院の伴奏科を奨めてくださったんです。そこは28歳以下という年齢制限があり、ぎりぎり間に合うということで、半年間懸命に受験勉強してリート伴奏科に受かることができました。

—— 音楽を学ぶうえで、留学先の環境はいかがでしたか？

恩田 エリザベート王妃音楽院はこぢんまりとしており、少数精鋭でプロの音楽家を育てることに特化しています。授業はピアノのレッスンがほとんどでした。学校と寮が同じ建物で、自分の部屋にもグランドピアノが置かれています。交通の不便な場所であって休日の外出もままならず、まさに修道院のように閉じこもって音楽だけに集中できる環境でした。寮での会話はフランス語、英語のみでしたので、自然と語学力も高まりましたね。パリ国立高等音楽院は世界に誇る大学ですので規模も大きく、授業のレポートも非常に幅広いのが特徴。先生も大半が卒業生で、天才といえる方ばかり。生徒も才能豊かな人が多く、非常に刺激的な環境です。

—— リート伴奏科のカリキュラムや試験について教えてください。

恩田 まず学年の初めにコンビを組む歌い手を決め、その後の1年間は、必ず週に1回、一緒にレッスンがあります。対象とするのは主にフランス歌曲とドイツリート、あと英語やスペイン語の歌曲ですね。初見が重要視され、オーケストラスコアを渡さ

れて、全部の楽器のパートをすぐにピアノで弾いたり。ストラヴィンスキーやシェーンベルクなどの現代曲を、初見でいかに自分の解釈で弾くか、など。また歌の伴奏ですので声の質により移調が必要なことがあり、楽譜を見ながら2度下で弾くというような勉強もします。あとソプラノ、アルト、テノール、バスの四声体を主とする合唱のスコアを見て、ピアノで弾くというようなこともします。鍵盤和声の授業での試験としては、例えば、ピアノを使わずにメロディ課題をシューマン風に和声付けなさい、とか。グリークなどロマン派の曲の1ページを渡されて、限られた時間の中で全て暗記しなさい、とか。課題曲を3つのテーマで即興で変奏しなさい、とか。どれも伴奏家としてなくてはならない技量の習得に直接役立つものばかりです。

—— 異国での暮らしはいかがですか？

恩田 ベルギー時代の最初の1年半ほどは寮生活でした。今はノートルダム寺院近くのアパートに住んで自炊しています。フランスのアパートは防音の部屋はほとんどなく、大家さんが楽器使用を認めてくれても隣家から苦情が出たり、なかなか大変なんです。ピアノを弾いて疲れたら公園を散歩したり、コンサートにもよく行きます。最近では内田光子、ソ



▲パリ国立高等音楽院のキャンパスにて

コロフ、ツイメルマンの演奏会が印象に残っています。生演奏はやはり刺激になりますね。

—— 留学して一番変わったことは？

恩田 どうやって自分の音楽をつくるのか、という部分で大きく変わりましたね。何かを伝えたいと思ったとき、その思い以上の表現をしないと伝わらないということを学びました。そのためにも専門分野だけでなく、音楽全般の知識が必要だと思知らされました。



▲パリのアジアレストランにて。右からサログロウ氏、恩田さん、エルバジャ氏。

—— 留学を希望している後輩へアドバイス。

恩田 当たり前ですが、やはり語学力は大切です。語学授業はもちろん、外国人教授とのレッスンや交流などを積極的に活用すると良いでしょう。外国では、自分の意見を自分の言葉で伝えることが求められますから。あと、書類提出にはきっと苦勞すると思いますが、なかなかビザがおりなくても諦めないように。根性と忍耐で頑張ってください。

—— 今後の予定、これからの夢をお聞かせください。

恩田 今年10月にはベルギーでソロコンサートを、11月にはパリ在住のソプラノ歌手・石井友子さんと日本歌曲を中心としたリサイタルを企画しています。徐々に伴奏の仕事が始めていますが、今後もっと深く学び、色々な方と共演していけたらと思っています。

各地で好演！ ウィンドアンサンブル&管弦楽団演奏会

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブルの夏の公演が、去る7月16日東京芸術劇場 コンサートホールにて開催されました。またそれに先駆け、同窓会沖縄県支部の方々の協力により、7月11日浦添市でだこホール、7月13日沖縄市民会館で演奏会が行われ、いずれの会場も多く聴衆が来場しました。

指揮者に本学の名誉教授で米国吹奏楽界の重鎮、レイ・クレマー氏を、



ソリストにはシカゴ交響楽団首席トランペット奏者、クリストファー・マーティン氏を迎えた他、作曲家のJ. ジルー女史、K. ヴァルツィック氏も演奏旅行に同行し、米国の最新レパートリーを中心に演奏しました。

ジルー女史が、日本の浮世絵が描かれた「しおり」からインスピレーションを得て作曲された交響曲は、和太鼓などを効果的に使った色彩豊かな傑作でクレマー教授と本学に捧げられました。また、ヴァルツィック氏の協奏曲「ガウチョ」では、ソロを務めたマーティン氏の柔らかい音色と高度なテクニックに、多くの聴衆が魅了されました。さらに本学出身の八木澤教司氏作曲「眩い星座になるために…」(2013年改訂版・初演)の他、吹奏楽コンクールの課題曲も披露。各会場共、暑い夏を吹き飛ばすさわやかな響きに、ホールには盛大な拍手と歓声がかどましました。

* * * * *

武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会が、

9月10日東京オペラシティコンサートホールで、同窓会島根、鳥取両支部の方々の協力により、9月14日島根県芸術文化センター、9月15日鳥取県民文化会館「梨花ホール」で行われました。

カールマン・ベルケシュ教授の指揮で、ショスタコーヴィチ：祝典序曲 Op.96、ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番 Op.18、チャイコフスキー：《くるみ割り人形》組曲 Op.71a、ボロディン：《イーゴリ公》より「ダグタン人の踊り」を熱演。ピアノソリストは学生オーディション合格者 犬飼まお（音楽学部ヴィルトゥオーソ学科2年 9/10）、清水弘治（大学院ヴィルトゥオーソコース1年 9/14、15）が務め、華やかなテクニックを披露。オーケストラはロシア作曲家の名曲をダイナミックに表現し、会場から温かい拍手が送られました。



LOOK at TOMORROW

REPORT ②

江古田新キャンパスプロジェクト

今回は、新キャンパスの完成イメージ図をお届けします。

前号でもお知らせしましたが、新しい



キャンパスは、地下1階に掘り下げた中庭上の広場「サンクンガーデン」を特徴としています。このキャンパス中央に設けたサンクンガーデンに面して図書館や食堂といった学生生活の拠点となる機能を配置することで、学生同士あるいは学生と教員の交流の場として機能します。

武蔵野は、学生と教職員の距離が近いという多くの卒業生の声が聞こえます。友人・教職員と交わる中での「人間形成」

の場として温かい雰囲気をもち、また「音楽芸術の研鑽」をする上で機能的に洗練・整備された魅力ある最新のキャンパスをご期待ください。

聴衆を魅了した公開講座シリーズ

室内管弦楽団定期演奏会

本学室内管弦楽団演奏会（指揮：クルト・グントナー本学客員教授）が6月28日、江古田キャンパス ベートーヴェンホールにおいて開催され、



見事に息の合ったアンサンブルを軽やかに響かせました。

プログラムは、エルガー：序奏とアレグロ、ハイドン：チェロ協奏曲 ハ長調、ベートーヴェン：交響曲第8番。

ハイドンでは、チェロ独奏に迎えた山崎みのり本学講師の伸びやかな音色とオーケストラとの対話が美しく、魅力溢れる演奏は多くの聴衆の心をとらえました。

* * * * *

ケマル・ゲキチ ピアノリサイタル

去る7月3日、客員教授として毎年本学を訪れ、指導に当たって



いるケマル・ゲキチ氏のピアノリサイタルが、ベートーヴェンホールにおいて開催されました。

プログラムは、ショパン：4つのスケルツォ、ワーグナー＝リスト：《タンホイザー》序曲、リスト：ピアノ・ソナタ ロ短調というゲキチ氏ならではの重厚なもの。氏の研ぎ澄まされたテクニック、渾身の演奏に、超満員の聴衆からの拍手が鳴り止まず、アンコールに込めてラフマニノフ、リストの数々の名曲が披露され、現代を代表するヴィルトゥオーソ・ピアニストとしての氏の魅力が存分に発揮された一夜となりました。

軽井沢で音楽教室ミュージックキャンプ開催

武蔵野音楽大学附属音楽教室の夏の恒例行事“ミュージックキャンプ”が7月下旬から8月上旬にかけて開催されました。江古田・入間・多摩各教室の生徒たちは、都会の喧騒を離れ自然豊かな本学軽井沢高原研修センターへ。キャンプに参加した小学校3年生から高校生までの生徒たちは“音楽”という共通の目標に向かい、年齢を超えて協力し、2泊3日の生活を共にしました。

高原のさわやかな空気のもと、キャンプでは、普段はめったに会うことのない仲間と、室内楽、合唱、合奏等のアンサンブルを集中的に学び、またその成果を2日目のコンサートで一生懸命演奏する姿が。コンサートを終えた生徒たちの顔には達成感と自信が溢れていました。

このほか、みんなでレクリエーションをしたり、班にわかれて出し物をしたりと交流を深め、最終日には浅間山



の麓に広がる「鬼押し出し園」を散策し帰路につきました。

美しい自然の中で体験した仲間とのふれあい、音楽経験はかけがえのない夏の思い出となったことでしょう。

平成25年度 同窓会全国総会開催

去る8月25日、武蔵野音楽大学同窓会全国総会が長崎市「ホテルニュー長崎」において開催されました。

当日は生憎の雨模様でしたが、全国各地から130名余の同窓生が集いました。総会后、本学ヴィルトゥオーソ学科の学生による記念演奏会が開かれ、学生の真摯な演奏に温かい拍手が

送られました。

引き続き懇親会では、同窓生同士、近況や情報交換をするなど懐かしい出会いに和やかな笑顔が溢れ、また長崎県支部の皆様の心温まる企画で、長崎に伝わる龍踊り、明清楽が披露され、大いに盛り上がり賑やかな会となりました。翌日には名所観光ツアーが行われ、参加した同窓生は楽しいひと時を過ごしました。



着任外国人教授紹介 (平成25年度後期)



ジョン・ダムガード (ピアノ/デンマーク)

デンマークのピアニスト。ゲオルク・ヴァン・ヘーリ、イロナ・コボシュ、ウィルヘルム・ケンプのもとで研鑽を積む。デンマーク王立音楽院で助教授、武蔵野音楽大学にて1979年～81年まで客員教授を務めた後、'84年からはオーフス王立音楽アカデミー教授を務めた。世界各国で主に古典派とロマン派及びデンマークのピアノ音楽を含む作品のコンサートを行っている他、多くのコンクールで審査員を務める。



インゴ・ゴリツキー (オーボエ/ドイツ)

ドイツのオーボエ奏者。フライブルク音楽大学でフルートをグスタフ・シュックに、ピアノをピヒト・アクセンフェルトに、さらにデトモルト音楽アカデミーのハンス・ペーター・シュミッツのもとでフルートを研鑽後、オーボエに転向。ヘルムート・ヴィンシャーマンに師事し、1964年ドイツ音楽大学コンクールオーボエ部門第一位、プラハとジュネーヴの国際音楽コンクール入賞。パーゼル交響楽団、フランクフルト放送交響楽団の首席奏者を務めたほか、ハノーファー音楽大学とシュトゥットガルト音楽大学でも後進の指導に当たり、独奏および室内楽活動、マスタークラス、レコーディングを活発に行っている。



テリー・オースティン (ウィンドアンサンブル指揮/アメリカ)

インディアナ大学で音楽教育を専攻、またハワイ大学で修士号、ウィスコンシン・マディソン大学で博士号を得る。現在はヴァージニア・コモンウェルス大学のバンド・ディレクターと教授を務め、同大学のシンフォニック・ウィンドアンサンブルの名声を全米に広めた。ゲスト・コンダクター、クリニシャン、審査員としても活躍するほか、音楽教育関連の著作も数多く執筆している。

平成25年度 武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 オープンキャンパス・学校説明会のお知らせ

武蔵野音楽大学・附属高等学校に進学を希望している高校生、中学生、小学生とその指導者、保護者の方々を対象としたオープンキャンパス・学校説明会を下記のとおり開催します。ぜひご参加ください。(参加無料)

【日 時】11月17日(日) 10:00～16:00

【会 場】武蔵野音楽大学 入間キャンパス 【申込締切】11月5日(火)

【説明会の内容】 ●ガイダンス(大学・高等学校別に行います) ●ミニ・コンサート

●受験相談(希望者のみ) ●ワンポイント・レッスン(希望者のみ)

【お申込み・お問合せ】武蔵野音楽学園広報企画室

〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1-13-1 TEL.03-3992-1125 FAX.03-3991-7599

※学園ホームページ <http://www.musashino-music.ac.jp/>

モバイルサイト <http://musaon.jp/> から、お申し込みができます。

武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 平成25年度 冬期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
音楽大学 受験講習会	平成25年12月23日(月) ～26日(木)	平成25年11月12日(火) ～12月12日(木)	武蔵野音楽大学 江古田キャンパス
高校音楽科受験 講習会	平成25年12月24日(火) ～26日(木)		

要項請求：武蔵野音楽学園広報企画室、またはホームページ、モバイルサイトにてお申し込みください。(要項は無料、郵送料は学園が負担します)

お問合せ・お申込み：武蔵野音楽学園広報企画室 TEL.03-3992-1125

学園ホームページ <http://www.musashino-music.ac.jp/> モバイルサイト <http://musaon.jp/>

● 表紙の顔



ペーター・ヤブロンスキー氏

来る10月30日、武蔵野音楽大学2013年度公開講座シリーズに、世界的なピアニスト、ペーター・ヤブロンスキー氏が登場します。

ヤブロンスキー氏は南スウェーデン生まれで、6歳でピアノを始め、たちまち非凡な才能を発揮して、11歳でピアノソロデビュー、翌年にはモーツァルトのK.453でコンチェルトデビューを果たしました。マルメ音楽アカデミーを経て英国王立音楽大学にてピアノと指揮を学び、在学中にヴラディーミル・アシュケナージの目にとまり、アシュケナージ指揮ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団との共演でDeccaからCDデビューしました。

1992年ワシントンDC、1993年ロンドン、ロイヤル・フェスティヴァル・ホールでのデビュー以来、シャイー、ミョンフン、デュトワ、ゲルギエフ、アシュケナージ等の指揮による、フィラデルフィア管弦楽団、ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団、BBC交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、フランス国立管弦楽団、NHK交響楽団など世界のトップオーケストラと共演するほか、多数のCDをリリースしています。

2012-2013シーズンも、ミュンヘン、ブリュッセル、ソウル、日本などで公演を行い、ソロのほかイギリス、メキシコ、南スウェーデン等で室内楽、指揮、芸術監督を務めるなど、世界各地で活躍しています。

1997年、ヴォイチェフ・キラルから献呈されたコンチェルトを世界初演し、オルフェウス賞受賞。2005年、スウェーデン国王より文化功労章メダルが授与されました。

※講座の詳細は本誌P.14をご覧ください



武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、江古田新キャンパス建設基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。 学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成25年5月1日から7月25日までに寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

【同窓生】

青木 大様 熱田美智子様 跡見嘉代子様 栗野敏子様 石丸佳代子様 市川恵美子様 伊藤菊子様 井上裕子様 岩井ゆう子様 上野浩美様 上原正子様 内野公子様 鮎澤俊雄様 大久保優美子様 大澤玲子様 太田朋子様 太田春子様 大坪亮子様 風原由美子様 片岡洋子様 門 嵩様 金子朝子様 金子道子様 川尻瑞枝様 川谷登喜子様 川名七重様 木野慶三様 工藤史子様 久米泰好様 小池美理様 小下 公様 後藤 薫様 酒井香代子様 佐久本眞智子様 佐々木登代子様 清水智子様 高砂有美様 高島登美子様 高薄千栄子様 高瀬眞由美様 高橋利子様 竹内順子様 田中久美子様 谷川美千代様 近間浩美様 土屋栄子様 土井清子様 徳王雅美様 鳥飼真喜子様 永田伸子様 長柄弘道様 西村久枝様 橋本興一様 初田茂子様 濱島幸枝様 林 敦子様 林 朋子様 林 裕美子様 日尾野美香様 廣瀬恵子様 深澤聖子様 福井裕子様 藤本勝子様 古川薫子様 古家通代様 前田榮一様 増田直美様 松浦靖子様 松本寛子様 御宿弥寿子様 参木京子様 三森多賀子様 宮城崇美子様 宮下悠紀子様 茂垣祥子様 山崎道子様 山中原子様 山本昌一様 山本玉枝様 山本文子様 結城貞子様 吉崎憲治様 吉田厚子様 昭和38年度卒業生同期会有志様 同窓会京都府支部様 同窓会富山県支部会員一同様

【在学生・同ご父母】

飯作盛志様 伊藤俊介様 岩下敬三様 岡部行伸様 笠原 力様 鍛冶淳一様 片岡洋一様 神田一孝様 小池あや子様 高口宙之様 小林昌樹様 佐久間芳子様 鈴木義雄様 高堂 伸様 高橋 賢様 武田拓也様 田島将雄様 土田登美江様 鶴岡賢治様 長澤健治様 長沢弘行様 中島昌人様 平林嘉之様 布施信彦様 本木 正様 松下孝到様 松原 久様 三上卓様 宮澤倫太郎様 森 万里子様 山川裕美様 山口重利様 山口靖代様 山館冬樹様 渡辺茂登様

【役員・教職員・一般・他】

阿久津三智子様 池澤佳代子様 石川 篤様 一杉久雄様 今泉裕之様 岩下恭子様 遠藤麻珠様 大久保 薫様 大竹亮様 大槻恵司様 岡 珠世様 加島良和様 加藤由紀子様 川名 尚様 岸本 力様 木谷えり様 木谷 怜様 工藤 綾様 黒木章子様 佐藤 愛様 佐藤しのぶ様 佐藤洋子様 佐野悦郎様 澤本恒夫様 柴 香苗様 清水吉六様 須藤麻紀子様 谷 友博様 戸田史郎様 中川俊宏様 野尻 米様 野村邦武様 早川恭子様 日高正枝様 鮎井朋子様 堀内康雄様 前澤君恵様 前田 淳様 丸山忠璋様 宮木ゆかり様 山越正秀様 山城浩一様 山内みどり様 吉田香織様 脇谷真弓様 渡邊規久雄様 ピアノ新人会様 (他に匿名を希望される方31名)

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

- リチャ・アルバナーゼ＝ブッチーニ国際音楽コンクール2013（アメリカ） 第1位入賞（順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）
大西 宇宙（平成20年大学卒業声楽専攻 本大学院修士課程修了）
- 第31回 ピエロ・ポーニ国際音楽コンクール（イタリア） 優勝、観客賞、批評家賞受賞
澤山 晶子（平成13年大学卒業声楽専攻）
- 第4回 カラリオ市国際ピアノコンクール（イタリア） 第1位入賞、聴衆賞受賞、ソロリサイタル開催決定
金子 淳（平成21年大学卒業ピアノ専攻 本大学院修士課程修了）
- 第1回 ヨーレ・ディ・マリア国際音楽コンクール（イタリア） 第2位入賞
澤山 晶子（平成13年大学卒業声楽専攻）
- 文化庁 平成25年度 新進芸術家海外研修制度研修員（専門分野：テノール）として派遣決定
曾我 雄一（平成12年大学卒業声楽専攻）
- 文化庁 平成25年度 新進芸術家海外研修制度研修員（専門分野：バス）として派遣決定
三戸 大久（平成12年大学卒業声楽専攻）
- 第49回 日伊音楽コンクール2013 第2位入賞 田村 佳子（平成10年大学卒業声楽専攻 本高校卒）、入選 眞塩 直（平成19年大学卒業声楽専攻 本大学院修士課程修了）、●第25回 宝塚ベガ音楽コンクール ピアノ部門 第2位入賞 野上 剛（平成24年大学卒業ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学）、●第2回 クラシック愛好家作曲コンクール 第2位入賞（1位なし） 渡辺 雄司（平成21年大学卒業ピアノ専攻）、●第10回 かがりの里音楽コンクール 第2位入賞 鳴神 綾香（平成24年大学卒業ピアノ専攻）、●第32回 飯塚新人音楽コンクール ピアノ部門 第3位入賞 前隈 仁裕（平成23年大学卒業ピアノ専攻 本大学院修士課程修了）、●奏楽堂日本歌曲コンクール 第24回歌唱部門 第3位入賞 山本 希希子（平成12年大学卒業声楽専攻）、●第28回 練馬区新人演奏会出演者選考オーディション ピアノ部門 優秀賞受賞 奥村 奈々（平成25年大学卒業ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学）、●第13回 全日本アールンピアノコンペティション 総合全国大会2 銅賞受賞 林 麗子（本高校2年次在学ピアノ専攻）

※上記の他多数。大学ホームページをご覧ください。

平成25年度 10月～12月 公開講座・演奏会のお知らせ

武蔵野音楽大学教員による室内楽コンサート	10月 8日(火) 18:30 ベートーヴェンホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
出演=小池ちとせ (Pf.)、深山尚久 (Vn.)、安富 洋 (Va.)、三宅 進 (Vc.)、ツォルト・ティバイ (Cb.) 曲目 = W.A. モーツァルト: ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 K.478、R. シューマン: ピアノ四重奏曲 変ホ長調 Op.47 シューベルト: ピアノ五重奏曲 イ長調 D.667、Op.114「ます」		
第16回 武蔵野音楽大学パルナソス多摩女声合唱団演奏会	10月18日(金) 19:00 シューベルトホール (多摩)	¥1,000 (全席自由)
指揮=片山みゆき 曲目=《フォーレ合唱曲集》より アヴェ・ヴェルム・コルプス 他、《見渡せば 明治の唱歌編曲集》(寺嶋陸也編曲) 他 ※詳しい内容は、武蔵野音楽大学パルナソス多摩 (TEL.042-389-0711) までお問い合わせください。		
ペーター・ヤブロンスキー ピアノ公開講座 ～インタビュー&マスタークラス～		
◎第1部 インタビュー インタビュアー=福井直昭	10月30日(水) 18:30 ベートーヴェンホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
◎第2部 マスタークラス		
アリベルト・ライマン & アクセル・パウニ公開講座 ～現代歌曲ライマン氏の作品を中心に～	10月31日(木) 18:30 モーツァルトホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
武蔵野音楽大学シンフォニック ウィンド オーケストラ演奏会	11月 1日(金) 18:30 バッハザール (入間)	¥1,000 (全席自由)
指揮=前田 淳 曲目=チャンス: 呪文と踊り、ギリングハム: 歓喜の歌、グレッグソン: 剣と王冠 他		
ニュー・ストリーム・コンサート20 ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会2～	11月12日(火) 19:00 トップンホール	¥1,500 (全席自由)
出演=犬飼まお (Pf.)、後藤亜蘭 (Fg.)、矢沢まどか (Vn.)、星野すみれ (Fl.)、井山夏実 (Cl.)、福井敬介 (Pf.)		
入間市「市民コンサート」 武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会 (主催: 入間市立中央公民館)	11月17日(日) 15:00 入間市市民会館	無料 (全席自由・要入場整理券)
指揮=北原幸男 ファゴット独奏=後藤亜蘭 (音楽学部ヴィルトゥオーソ学科4年・本学学生オーディション合格者) 曲目=ベートーヴェン: 序曲「コリオラン」Op.62、W.A. モーツァルト: ファゴット協奏曲 変ロ長調 K.191 (186e) ドヴォルジャーク: 交響曲 第9番 ホ短調 Op.95「新世界より」		
東京芸術劇場 & ミューザ川崎シンフォニーホール共同企画		
「第4回音楽大学オーケストラ・フェスティバル」 武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会 (主催: 音楽大学オーケストラ・フェスティバル実行委員会)	11月23日(土) 15:00 東京芸術劇場 コンサートホール	¥1,000 (全席指定)
指揮=北原幸男 曲目=ショスタコーヴィチ: 交響曲 第10番 ホ短調 Op.93 ※同日は昭和音楽大学も出演します。		
武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会	12月 3日(火) 18:30 バッハザール (入間)	¥1,500 (指定席)
指揮=飯守泰次郎 合唱指揮=栗山文昭	12月 4日(水) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール	¥1,500 (全席指定)
曲目=ブルックナー: テ・デウム 長調 独唱=佐藤美枝子 (Sop.)、河野めぐみ (Alt.)、水口 聡 (Ten.)、谷 友博 (Bas.) ベートーヴェン: 交響曲 第9番 二短調 Op.125「合唱付き」 独唱=佐藤美枝子 (Sop.)、河野めぐみ (Alt.)、水口 聡 (Ten.)、堀内康雄 (Bar.)		
武蔵野音楽大学室内管弦楽団演奏会	12月13日(金) 18:30 ベートーヴェンホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
指揮=クルト・グントナー 共演=インゴ・ゴリツキー (Ob.)、青山聖樹 (Ob.)、岡崎耕治 (Fg.) 曲目=J.S. バッハ: オーボエ・ダモアレ協奏曲 長調 BWV1053、オーボエ・ダモアレ協奏曲 イ長調 BWV1055、組曲 第3番 二長調 BWV1068 他		
武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会	12月15日(日) 14:00 藤岡すみかぼみらい館 (群馬県)	一般¥1,500 / 小中高¥1,000 (全席自由)
指揮=テリー・オースティン	12月17日(火) 18:30 東京オペラシティ コンサートホール	¥1,500 (全席指定)

お問合せ ● 武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部 TEL.03-3992-1120

※講師の病気、その他やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

※チケットは武蔵野音楽学園ホームページ <http://www.musashino-music.ac.jp/> でもご予約ができます。

平成26年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学の各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。郵送をご希望の方(平成26年度受験対象者)には、無料でお送りいたします。本学ホームページ、モバイルサイトの「資料請求フォーム」からご請求ください。お電話でのお申し込みは、氏名、住所、電話番号、および附属高校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院、別科の別をお知らせください。(要項は無料、郵送料は学園が負担します)

なお、冬期受験講習会を受講の方には講習期間中に配付します。

【お問合せ・請求先】武蔵野音楽学園広報企画室
〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL.03-3992-1125
学園ホームページ <http://www.musashino-music.ac.jp/>
モバイルサイト <http://musaon.jp/>

編集後記

パリ国立高等音楽院に在籍中の恩田文江さんをお招きして始まった新企画「卒業生の留学ライフ」。夢と希望、向上心を抱いて武蔵野から留学の途についた皆さんを今後ご紹介してゆきます。

2020年、東京オリンピックの開催が決定しました。7年後には本学園の新キャンパスももちろん完成しています。その頃、あなたはどこで何をしているのでしょうか。もしかしたら、どこかの国に留学中かも… (編)。

ムクピエラ

アンゴラ 直径24cm

サハラ砂漠以南の多くのアフリカ地域では、かつて数多くの王国が存在していた。そのような王制国家の中で、太鼓や鐘などの一部の楽器は、単に「音楽を奏でる道具」を超えて、王位を象徴する表章楽器として、特別な位置づけがされていた。

ムクピエラは、アフリカ南西部アンゴラ地域のチョクウェ族の典型的な表章楽器のひとつである。胴は1本の丸太からくり抜かれていて、その両面には音高の異なる2枚の革が張られている。また側面には、様式化されたチョクウェ族の顔と幾何学文様が精緻に施されている。さらに、胴中央部に見られる孔は、本来は共鳴膜として蜘蛛の卵の保護膜が貼られる部分で、これは一種のサワリ的な効果を得るためである。

20世紀中頃まで、チョクウェ族の王権象徴の宝であったムクピエラは、普段は王の第一夫人の家に大切に保管され、使用される場合には、宮廷の合奏団の中でも重要な楽器としてペアで奏された。その他、時には王の到着を知らせたり、また戦時には情報を伝えるという実用的な役割を果たすこともあり、チョクウェ族の人々にとってなくてはならない「王の楽器」であった。そして、王が死んだ時にはムクピエラの革は破ら



れるのが慣わしで、その革は消えた王の命の象徴として、宮廷の囲いに吊り下げられた。

今日では、王制の凋落とともにムクピエラは作られなくなってしまったという。それでも人々はこのかつての「王の楽器」を、村の踊りの伴奏で用いたり、クウィタという新しい別の楽器に作り変えたりして、新たな息吹を吹き込んで、今も人々の心に深く響き続けている。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

江古田キャンパス楽器博物館休館のお知らせ

「江古田キャンパス楽器博物館」は、リニューアルオープンに向けて、現在休館中です。なお、「入間キャンパス楽器博物館」及び「パルナソス多摩楽器展示室」は通常通り開館しています。休館中は、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

❖ 目次 ❖

- ヴェルディ・イヤーのイタリア音楽事情 堂満尚樹 ①
- 卒業生インタビュー ⑤
- パレットの色をふやそう 田島 勤
- 音楽の万華鏡 ⑦
- 1713年：バロック音楽の新たな展開 寺本まり子
- 卒業生の留学ライフ ⑧
- 異国で芽生えた伴奏家への想い 恩田文江
- MUSASHINO NEWS ⑩
- ❖各地で好演！ ウィンドアンサンブル&管弦楽団演奏会
- ❖江古田新キャンパスプロジェクト REPORT ②
- ❖聴衆を魅了した公開講座シリーズ
- ❖軽井沢で音楽教室ミュージックキャンプ開催
- ❖平成25年度 同窓会全国総会開催 ❖着任外国人教授紹介
- ❖平成25年度 武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 オープンキャンパス・学校説明会のお知らせ
- ❖武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 平成25年度冬期講習会のお知らせ
- ❖武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
- ❖栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
- ❖平成25年度 10月～12月公開講座・演奏会のお知らせ
- ❖平成26年度 入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発行 ❖

学校 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1

TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728

TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1

TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2013年10月1日発行 通巻第107号



モバイルサイト
<http://musaon.jp/>